

## 再訪

## 有坂 広一

管理人の谷川がゴミを出していると、隣のマンションの新任者が挨拶に現れた。

「オンステージ墨田の管理人福原と申します」

笑みを浮かべ、男はフローラ境川の建物を見上げながら、いいマンションですね、と世間ずれしたお世辞を口にした。会話の流れで、勤務時間の話になり、自分は週四日で午前中のみですと話した。

「貴方もそうですか」

「私は九時から五時までのフルタイムです」

谷川がこの違いを話すと、福原は驚いたような顔つきをした。

「えっ、そんなに。大変だね。それは大変だ。ご苦労様です」

いやな笑い方をして右手で敬礼した。それは敬うと言うよりも揶揄であり、また侮蔑に近いものを感じた。谷川はその《大変》という言葉に反発を覚えて、一言言わずにはいられなかった。

「いや、慣れっこになっているから、大変じゃないですよ。給料も稼げるしね」

「私は孫に小遣いをやる程度だから、気楽です」

「それもいいですね」

「定年後は遊びの時間だから」

双方、笑顔を浮かべているものの、言葉裏には向きになっていて、張り合っているような具合になった。給料のことを口にしたのは、相手の神経を刺激したのかもしれない。谷川は急いで話題を変えた。

「福原さんは、お住まいはどちらなの」

「小岩です。電車で通っているけど、近いですよ」

「えっ、小岩なの」

「ご存じなの」

「多少知っているくらいです」

谷川にとって小岩は上京して最初に住んだ所だから、浅からぬ関わりがあり、いずれは訪れるつもりでいる。その時以来、二人は立話をするようになった。フローラ境川もオンステージ隅田も、十一階建てで、五十戸と四十八戸だから似たような規模である。船堀駅から徒歩で数分のところにあり、福原は電車だが谷川はバスで通っている。

一週間のうち、二人は土曜日のみ共通していて半日で終わった。一週間ほどした土曜日の朝、福原に声をかけられ、駅の周辺で飯でも食おうかと誘われた。今までそんなお付き合いをしたことはないので気が進まなかった。

「デカをやっていたから、ぼくの話は面白いよオ」

「ほう、デカですか」

警察官をデカというのは誇示しているようで、嫌味にも聞こえた。また浅いハンチング帽を被って、格好をつけているのも見え透いている。谷川は渋々承諾した。午後、船堀駅近くの軽食喫茶に入り、それぞれ注文して、福原はチキンライス、谷川はサンドウィッチを頼んだが、あまり食欲がなく無理して口に運んだ。会話は主に福原が主導し、細君との馴初め、家族構成、趣味の尺八、テレビに出たことなど喋った。高校を卒業して警察官をしていた父親の勧めで、同じ仕事をやるようになった。十六年間務め、それからスーパーの警備員二十年というのが主なキャリアだった。

「カミさんは俺より十歳若くてね。まだ五十代だよ。肌なんか俺と違ってピチピチしているな」福原は自慢するでなく話した。

「若いんだね。私なんか妻に先立たれてね」

「何だ、谷川さんは一人者かい」

「そうだよ」

「それじゃ寂しいだろう」福原は優位に立って慰める口調だった。

「ほぼ毎日、仕事に出ているから紛らわせるけどね」

「前は何をしていたの」

「ミシンの販売会社で庶務の仕事をしていた」

「今時、ミシンなんて売っているのかい」

彼は一段と見下げるように言う。

「売っているさ。手芸などハンドメイドの好きな人に必要だから」

「でも衰退しているよな」

「それは仕方ないさ」

給料もボーナスも少なく、期待していた退職金も僅かだった。定年退職後に仕事をするのも貯金が少なくて、老後が不安だからだ。神経を使う仕事をしたくないので、楽な職種を探していたらマンションの管理員募集が目にとまり、品川区の会社で面接した。社長から午前中は清掃、午後から受付だと説明を聞くと、これぞ天職だと心が躍った。半日は座っていて、本が読めると根拠もなく思った。近くに住んでいると言う理由で運よく採用された。勤め出すと、その通りだった。

自宅からバスと徒歩で十五分というのもいい。何よりも好感を持ったのは、居住者が平均的な市民が大方で、自己主張の強い人や一時代前の商店主など、見かけないことだ。管理社会に揉まれ、誰とでも対等にかかわり合うことを心得ている。上司も同僚も現場にいないので気を遣うこともなく、二年半が淡々と過ぎた。

「コミュニティの社員は人柄がいいし、居住者は質のいいほうです」谷川は強調した。

決して誇張ではない。もし近くにいたら前近代的な感じのする福原くらいかもしれない。谷川はこういう手合いは大嫌いだ。彼等は何かにつけて嫌味や皮肉を言い、差別よりもたちが悪かった。

「それはうちも同じだね。見渡したところ、いい線いっている」

「結構だね。私は車夫馬蹄のたぐいは苦手だね、ハッタリ野郎なんて問題外だ」

福原を牽制したつもりだった。彼は虚勢を張る傾向があり、帽子もデカという言い方も格好をつけているのだ。

「福原さん、その帽子は似合うねえ。映画に出てくる刑事みたいだ」

「そうかね。ハハハ」

「強そうだしね」

「やくざとも渡り合ったことがあるよ」

二時間ほどいたが、興味のない話ばかりで、「面白い話」などまったくなくて、帰る時勘定は割勘を主張したが福原は自分が払うと言って聞かなかった。

「福原さんって、負けず嫌いだね」

「だって、俺が誘ったんだから」

「じゃあ、次は私が持つよ」

バス停でお互いに片手を上げて別れた。鬱陶しそうな親父だなと呟いていたら何分かしてバスが来、座席に座ると眉間に立皺を寄せて、やれやれと疲れた顔つきをした。六十七歳の谷川は福原とは同じような年齢だが、彼は野性的な力を持っていて、押しも強そうだから、合いそうになかったが、どういうタイプであろうとも、交流しないわけにはいかない。一日中顔を合わせているわけではないから、深刻に考えることもないが。

毎日、当たり触りなく付き合うのだが、何かと谷川より上に出て競うようなところが目に付いた。親しくなるにつれて、言葉は乱暴で態度も横柄になった。開けっ広げな性格と言えはその通りだろうけど、谷川は慣れることがなかった。そして、しばしばこう言うの

だった。

「一日中というのは大変だねえ」

これほど神経に触る言葉はなかった。「大変」は止めてくれと注意したけれど、月日が経つても続いている。管理人の仕事は大方ものにしたが負担に感じていることがあり、それは各階を清掃する際に、高圧洗浄機を使用する作業である。水を強力噴射するので廊下の粉塵は除去できるのだが、問題はその後の処理で、厄介極まりなかった。ある日、終わってから外で立っていると、福原が通りかかり、わざとらしくプツと吹き出した。そして、

「大変だねえ」またこれだ。

「そんなに大げさに言うことはないだろう」谷川はムカツとした。

「金を稼ぐのも楽じゃないね」

福原はどうしても、その「大変だねえ」を口にせずにはいられないらしい。谷川はその度に口答えした。

「これぐらいなんでもないよ」とか、

「平気だよ」とか、

決まり文句を口にして否定するのだが、心中穏やかではなかった。言い方には嫌味がこもっていて悪意さえ感じた。必要以上に口にするのは給料の差だろう。

フルタイムと週四日の午前中だけとは、比べるべくもないから、嫌味の二つも言いたくなるのかもしれない。だが『大変だねえ』は神経の隅々まで響いた。雨だれの音でも毎日聞かされれば拷問になるのと同じである。彼は一定の間隔をおいて、絶妙なタイミングで口にするのを忘れなかった。

(糞つたれ！)

谷川は憎悪するようになり、しばしばカツと苛立った。気にするなと言ってもこれだけは気になるのだった。管理員室にいる時は、出来るだけ本を読んで福原のことは考えないようにし、また別の楽しみもあった。それは都内めぐりで、以前に住んだり勤めたりした土地を訪ねることだった。結婚する前から何度か住居や会社を変わっているの、再訪する所は何カ所もあり、しかし小岩はある理由で延び延びになっていた。心理的なこだわり過ぎなので、何とかクリアして、出かけるつもりでいるのだが、さらに二の足を踏む自体が生じたわけだ。つまり小岩は福原の生まれ故郷であり、現在も家族と一緒に住んでいるので、訪ねた際にバツタリ行き会いたくなくなった。せつかくの楽しみも薄らいでしまう。

正月二日、家に訪問者があった。娘夫婦が新年の挨拶にやってきた。正月には江戸川区の実家に子供を連れて顔を出すという習慣になっていて、妻が健在の頃から続けている。

リビングのテーブルでお節を並べてから、お屠蘇で乾杯した。妻がいた頃は手料理でもてなし、亡くなつてからはデパ地下で買ってきて、間に合わせている。孫の綾香を相手にしながら料理を味わった。

「このマンション、一人では広すぎるんじゃないの」  
明美が見回した。

「広いと言えば広いね」亭主が返事する。

「嫁さんでもらうか」と谷川。

「そんな女性、いるの」

「さあね」

谷川は笑いながら、周りに視線をやった。三LDKは一人暮らしの老人には広いと言うよりも怪しいと言っている。妻が他界してからというもの、交流も少なくななり、少数の友人と電話で慰めるくらいだった。谷川の暮らしぶりは単調で退屈だった。九十四歳まで生きた父のDNAを受け継いでいたら、後三十一年間は寿命を持つ。体が丈夫な上に土日はウォーキングをし、食事にも気を遣っている。下手すると父よりも長生き

するかもしれない。パートナーが欲しいが、もし阿久津さんさえよければ妻にしてもいいと勝手に考えている。阿久津さんは妻が英会話教室で知り合った近くの友人である。昨年の夏、一人で食べきれないからとメロンを持ってきてくれた。美人というほどではないけれど、人好きのする顔立ちをしている。その時、

「奥さんがいらした時は、とても楽しかったですよ」  
笑みを一杯に浮かべて言った。

「妻も阿久津さんと知り合えてよかったです、喜んでいました。夫がいなければ一緒に住んでもいいなんて、冗談を言っていたくらいです」

「まあ、そんなことを」

阿久津さんは弾けるように笑うので、いつそ華やいだ。彼女は魅力的な容姿をしているのに、長年一人暮らしをしているので、謎に包まれていた。恋人がいるのではないかと亡妻に聞いたら、「いないみたい」と知らない様子だった。だってセックスくらいしたいだろうと言うと、余計なことよと窘めた。阿久津由良美は現在六二歳。年齢に関係なく色香はいよいよ増すばかりのように見える。もっと話しかけて親密になるうか

「お父さん、何を考えているの。顔が緩んでいるけど」

明美が冷やかした。

「それよりも、もつとビールを飲んでよ。二人とも若いんだから。綾香ちゃんにはジュースをついであげるからね」

「うん、ありがとう」

「管理人のお仕事は順調ですか」亭主が聞いた。

「何とかやっています。ただ、隣のマンションの管理人と、軋轢があるけどね」

「どういう風に？」明美が心配そうだ。

「そいつ、何かにつけて、大変だねえと言うんだ。そんなこと言われたくないな」

「でも、たいしたことないんじゃないの」明美は訝しげである。

「それがしつこいんだ。意地悪としか思えない。給料がお父さんより少ないから、嫉妬しているんだよ。警察官をやっていたそうだけど、品性の低い奴でね」

「そういう言葉って、嫌ですよね」と亭主。「何となく分かります。ねぎらつた振りをして嫌味を言っているんですよ」

「ちつとも大変じゃないのに、大変だ、大変だと言うわけね」と明美。

「そう、そうだよ」

「そりや頭に来るわね」

そんな話をしながら、嫌がらせを受けて困っている自分を見せたくないで、谷川は口をつぐんだ。それに身内に話したところで解決するわけでもない。しかし考えてみたら福原と隣人になって七ヶ月が過ぎたことになるが、これからも思いやられるなど憂鬱になった。できれば交通事故にでも遭って死んでくれたらいいのだが、そんなわけにはいかない。三十分ほど雑談して、自分の部屋に引き上げることにした。立ち上がりかけると明美が聞いた。

「今年の予定は何かあるの。前に小岩に行くと言っていたけど」

「小岩は当分、延期だね」

「どうして」

「その前に別のところに行くつもりだ」谷川は適当に答える。

「前に練馬に行ったでしょう」明美はよく憶えている

「うん、行った。あそこはよかったな。何もないけどよかった」

「何十年ぶりに行くなんで、凄い感慨ですよね」と娘の亭主。

「遠い旅先に来たみたいで、独得の気分が味わえます」

「いいですええ」

それから谷川は自分の部屋に戻った。客が来ると遠慮なく席をはずすのが、妻のいた頃からのやり方だった。家族にとって社交嫌いというのは厄介な存在である。彼は喋ることは喋るが、おおむね口数の少ないほうだ。しかし物静かに座っているのはジリジリして耐え難いものである。そういう性格でも、管理人の仕事に支障をきたすようなことはない。むしろ居住者と適度の距離を取り、私的な領域に入り込まないようにしているので、迷惑がられることはなかった。

ベッドに横たわると、長々と体を延ばして何度も伸びをした。リラックスしていたら、昨年出かけた練馬のことが思い出された。西武池袋線の富士見台で、井村アパートに三年間住み、居心地はよかった。大家の井村さん達とは淡い交流をした。

四十年ぶりに訪ねると、二階建てのアパートはそのまま残っていたので、それが嬉しかった。階下は物置になっていて、工具や木材がびっしりと立てかけてあった。二階の端の四畳半が、谷川の住んでいた部屋である。大家の井村さんは大工の棟梁で、その道では格式のある家だった。井村家の住まいは別棟にあり、庭には七十年代後半の女が立っていた。その女性は当時か

ら跡を継いでいた息子の若奥さんである。体にたつぷり肉がついていたが、顔つきは往年の面影を宿していた。別の所で見たら誰だか分からないだろう。こちらの名前を名乗って、驚かすのは不本意なので通り過ぎた。少し歩いてからもう一度見ようと引き返したら、若奥さんはまだ庭にいた。なかなか去り難いのでそれを三度繰り返し返した。アパートの周辺は変貌を遂げながら、原型を留めていて、彼はこぼれるような笑みを浮かべて、見入り、いつまでも飽きなかった。帰る道々懐かしい気分が押し寄せてきて、ついつい笑ってしまい、見苦しいような顔になり困ったものだった。

次には何とかして小岩に行ってみようというもの。上京して大学に入り、最初に住んだというモニユメンタルな土地である。女の問題で大家に嫌われ、追い出されてしまったから、苦々しい気持がないではない。あれから長い年月を経ているので、彼のスキヤンダルは免責されただろう。だが、新たな難物が現れた。オンステージ隅田の管理人が行く手を阻んでいる——

いつの間にか眠ってしまい、その間に娘達は部屋の扉を開けて、挨拶をして帰って行った。谷川はうつらうつらしながら生返事をした。そのまま眠り目を覚ましたのは四時頃で、中途半端な時間である。起きよう

としても起き上がれず、厭わしい気分になっていた。

何を考えてもお先真つ暗だ。時々こうした、どうしようもない鬱症状に陥るが、老年特有の現象なのか一人暮らしの身だからか。抗鬱剤を飲んでいつときが過ぎるのを待っていた。すると小岩が甦って来た。その商店街のバーは友達と飲みに行ったことがあり、そんなに値段は高くないので一人で出かけた。彼の相手になったひとみという女は三十四、五歳。二人で並んで座ると、ノースリーブの腕とくつついて、十九歳の谷川は、それだけで性的興奮を覚えた。ブヨツとした生々しい感触が今も記憶の底に張り付いている。

「どこに住んでいるの」ひとみが尋ねた。

「中野洋服店の二階。そこがアパートだよ」

「恋人はいるの」

「いないよ」

「私と同じね。昼間は美容師をしているの。どうして昼夜働いているかというとね、ボーイフレンドが欲しいからなの」

ひとみの話すことは職業的な戦略ではなさそうだった。谷川は自分も女友達が欲しいと話すと、「年が離れていてもいいの」ひとみが谷川の顔を覗いた。

「年なんか、関係ないよ」

「それなら、私と付き合ってみる」

「うん、いいよ」

そう返事をする、ひとみはせっかちに聞いた。

「じゃあ、今夜いくら使う？」

お金を沢山使わせないように配慮したのである。それから夜食用のおにぎり持ってきて、食べさせてくれた。二度目に飲みに行った時、ひとみが甘えるように聞いた。

「貴方のお部屋にお邪魔していい？」

「ああ、いいよ」

彼は気さくに返事をして、ナプキンに住所と略図を書いてやった。一週間後の日曜日の午後、ひとみがコスモスの花を手にしてやって来た。大学の夏休みが終わった頃である。店舗の二階は四部屋あり、大学生や勤め人が住んでいて、彼の部屋は日当たりの悪い三畳である。その日はどこの部屋にも人がいなかったの初めてひとみを抱いた。二時間ほど過ごして、帰る時は送って行った。途中、江戸川の河原に降り丈の高い雑草の茂った辺りに座った。ひとみは恋人人気取りで、谷川の肩に頭をもたせかけてきた。

「私、谷川さんと知り会えて、よかった。あんだ、私

のこと、どう思っているの」

「そりゃ好きだよ」

「それだけ。目が綺麗だとか、口許が可愛いとか、何か言ってる」

ひとみは若くはなく、美しくもなく、全体的にパツとしない。そういう女の悲哀に色気を感じていたのかもしれないなかった。

「そうだね。ルノアールの絵みたいな体つきがいいね」

「それなら嬉しいわ」

ひとみのぼってりした体が、肉食動物系の谷川の食指をそそった。話していると不意に小型の白い犬が駆けしてきた。その犬をどこかで見たことがあると思っていた。

「レオ、レオ……」

呼ぶ声があった。ハツとして声のほうを見ると、三メートルほど先に女が立っていた。住込み店員兼お手伝いの玉江だった。彼女は谷川達に気がついて知っているが知らぬふりをしていた。鎖から解き放たれたレオは、目の前に来てしっぽを振っている。

「あら、マルチーズ。可愛いわね」

谷川は、気が気ではなかった。

「私もこういう小型犬を飼ってみたいわ」

「……」

「ねえ、あんた、犬は嫌いな」

「犬は嫌いじゃないけど、あの女が嫌いだ」

「知っているの」

「住込みの女だ」

玉江は立ち止まったまま、レオの名前を呼び続け、こちらに近づいて来ようとはしない。そして犬は少しの間、うろついてから、玉江のほうに戻って行った。

谷川は玉枝の後姿を目で追いながら心理的な責苦のようない時を味わったよと、憎々しげに言った。年は二十歳くらいで住人から「玉ちゃん」と愛称で呼ばれ、声をかけられると、この上もなく卑しげな愛想笑いを浮かべるのだが、それが世慣れない谷川だと、ぶつすらしていた。

「人を見て対応する奴は好かんよ」

「変な感じの子なのね」

「育ちが悪いんだ。貧乏人の子だよ」谷川は不快そうな口調。「あんな醜い女、どうでもいいから、また近いうちに遊びに来て」

「うん、また抱いて」

そこで別れた。玉江に嫌われると住みづらくなるのは目に見えている。河原で見られて以来、挨拶しても

無視されるようになった。彼女は他の間借人達から信頼を得ているので、谷川など敵に回しても平気だろう。ひとみはしばしば訪ねて来て、大抵その日に帰るのだが、泊っていくこともあった。それは大家や他の住人からしたら、許されないことである。段々と周りから拒むような反応が伺えた。それがついに表面化して、大家が部屋に現れて、「お話があります」と上がり込まれた。大家の中野は正座して谷川を見据え、目線をそらそうとはせず一家の主らしい威厳をこめて言った。

「最近の谷川さんの行動は風紀上、好ましくありません。ご存じのように拙宅は小学生の女の子が二人います。申し訳ないが、ここを出て頂きたい」

ひとみが入り出すようになって一ヶ月が経っている。このまま屈したくないので一言二言反論すると大家はひるむことなく、筋の通った論を展開した。どう見ても谷川には分がなく、了解するしかなかった。二週間後には練馬に引越した。

あれから四十数年の年月が過ぎた。大家夫婦は健在だろうか。ひとみは結婚して孫でもいるにちがいない。

仕事始みの日から作戦を立て、できるだけ福原と顔を合わせないようにした。防犯ビデオで出勤時間をチ

ェックすると、彼は毎日のように同じ時刻に谷川のマンションの前を通って行く。その頃ゴミを出すから顔を合わせないためには避けるようにしたほうがいい。とにかく彼の、「大変だねえ」は絶対に御免だ。

一ヶ月が過ぎたけれど顔は一度も合わせていないからいい塩梅である。こんな風に時間が過ぎていけば自然に遠のいて赤の他人になっていくだろう。ある朝、居住者から猫の死骸が転がっているという連絡があった。まだ仕事前なのだが、

「すぐに片づけます」

早々と管理員室を出た。汚れた物はただちに撤去して人目に触れないようにしなければならぬ。猫の体中に何カ所の傷があり、血糊がついているからどこか人間が虐待して、ゴミ置き場に捨てて行ったのだろう。谷川は真っ先にスコップを持ってきて土をかけて見えないようにした。

「お早う」

背後に福原が立っていた。珍しく彼の声を聞いたよ  
うな気がした。

「おい、どうしたんだ」

「猫の死骸でね、傷だらけだ」

「ひゃー」

「清掃事務所に電話をして、引き取ってもらおうよ」

「苦勞なこった」

「仕方ないだろう」

「でも、あんたはいい年をして、よくやるよ」

「いい年とはなんだい」

谷川は頭に来た。そんな言い方はないだろう。彼は

普段からこの手の言葉を平気で口にした。

「福原さんだって大変じゃないのか」

「いや別に」

「いいなあ。あんたは年金をたくさんもらっているから、そんなに働くことはないからな。俺なんか、三十

何万だから少な過ぎる」

谷川は嘘ついて嘆いて見せた。以前に福原は年金が少なくて家のローンを抱えているとこぼしていたのを覚えていた。それを忘れたことにしてあえて言っていた。さらに続けた。

「冷蔵庫やテレビを買い替えなきゃいけないし、子供や孫に贈物をやったりするから、お金はかかるんだ」

「その点は俺も同じだ」

「でも、貯金はがっちりしているだろう」

「いやいや」

「これからの時代は、子供に面倒を見てもらうわけに

はいかないから、金は余計にあつたほうがいい。だからフルタイムは助かる」

「俺もフルタイムはいいと思うようになった」

「だったら、探したらどうだい。あんたはもつと働いて、稼いだほうがいい。こまめに新聞の折り込みを見ていると、見つかるぜ」

福原に別の所に移ってもらいたい一心だった。

「それがね、うちのマンションも住民から毎日出て来てほしいという要望があるそうだ」

「えッ、何だって、そんな話あるのかね」

「うん、理事会で考えているらしくてね。どう思うかね」

「どうかね、分からんなあ」

谷川は猫の死骸を新聞紙に包んで、所定の場所に運んだ。清掃会社に電話をするのは早過ぎるが、いったん管理員室に戻った。その間、福原の話にとらわれた。

勤務時間が同じになり、一日中、福原が管理員室に構えているかと思うと、いつそプレッシャーになりはしないか。何しろ福原が出ない日や午前中に終わって帰るとホッとするくらいだから。が動揺はなかった。彼もフルタイムになったら大変さは同じだし、嫌な口癖はなくなるかもしれないのだ。

どつちにしろ、例の言葉を口にして勝ち誇つたようにされるのは我慢ならない。人の苦勞を楽しんでいるとしか思えない。その後も意識して顔を合わせないようにしていた。その日、強風が吹いて、どこから飛んできたのか、中庭にピンチハンガーが落ちていた。みな女物の中にはパンツまでかけてある。管理員室に保管して掲示板に貼り紙を出した。マンションの住民が持主ならいいけれど、他所の物だと取りには来ない。厄介だと思いいながら外から見えないように置いた。そんなものがあると谷川も落ち着かなかつた。こんな時に限つて、

「阿久津さんと一緒になれたらいいなあ」

彼は女つ気が恋しくなつた。せめて妻がいればいいのにと思つたりした。こんな気持ちになるのは女もののせいだろうか。結局二週間経つても誰も取りに來なかつたので処分した。二枚のパンティは悩ませてくれたが。

三カ月間が過ぎて桜の時節が去り、次は秋楡だ。桜の木はないけれど秋楡が三本立つていて、葉が際限なく散るので折を見て掃かなければならなかつた。放っておけば管理会社の社員がうるさく言ってくる。箒で掃いていたらオンステージ隅田の理事長に話しかけら

れた。五十がらみの恰幅のいい男は仕事中に申し訳ないと断つてこう尋ねた。

「あなたの所のマンションだけど、廊下の掃除が行き届いていて、評判がいいですが、見せていただけませんか」

「いいですよ。どうぞ、どうぞ」

谷川は快く返事をして、理事長をエレベーターまで案内した。そして数分して戻つてくると、管理人さんの労働量としては、どうですか」

「まったく問題はありませぬ。機械の掃除はすぐに慣れます。モップなんかよりは、はるかに楽ですよ」

「当方では目下検討中ですが、メリットは大きいようですよ」

「部外者が申しあげるのも何ですが、是非おやりになるといいですよ。掃除のアイテムとして、欠かせないものです。あちこちのマンションでも使うようになりました」

「そうみたいですね。いづれ管理会社の担当者が参りますので、その節は教えてやってください」

理事長は丁寧な頭を下げて帰つて行く。福原が高圧洗浄機で掃除するというなら大賛成である。こんな小気味のいい話はない。高圧洗浄機は年配者には楽では

ないからだ。雑用が伴い、大層時間がかかる。噴射の後さらにモップで拭いたりしなければならぬ。福原のやり方を見ているとぞんざいで適当に手抜きしており、どう見ても掃除のプロではない。それに彼はハンディを背負っている。昔やった肺炎に影があり時には微熱が出ると言うのだ。再検査の必要があるとも聞いている。健康上の不安を抱えている福原には厳しいだろう。病気はどうあれ苦勞を分かち合ってもらいたい。自ら汗だくになってやれば、彼の中の悪意も消えるだろう。

「大変だねえ」

と言う意地の悪い言葉は口にしてもいたくない。

三日後の午前中、清掃を早めに終えて管理員室で一休みしていると福原が訪ねて来てビニール袋に入った弁当をくれた。何か聞いたたりすることがあると、缶コーヒーやジュースのたぐいを持参した。糖分を抑えているのでそんなものは欲しくないのだが、断ると強引に受け取らされるので一応もらっておいて後から捨てることにしている。

「オリジンで買って来た生姜焼き弁当だ」

「そんなことしなくてもいいよ」

「そう言わずに食べてよ。うまいぜ。ちよつと世話に

なるからさ」

午後から福原の上司のフロントマンに高圧洗浄機の説明をすることになっている。それで気を遣っているのか、いつもの優越者の態度が影を潜め、しかも百二十円のコーヒーでなく五百円もする弁当だ。

「洗浄機というのは難しいかい」

「いや、簡単だよ。むしろ快感といつていいくらいだ」  
谷川は心にもないことを口にした。

「経験者が言うのだから、間違いないやね」

「俺、この仕事に生き甲斐を感じているよ」

「それはいいことだ」

「福原さんもすぐにそうなるよ」

「そうか」

「居住者から毎日褒められたり、感謝の言葉をもたらしたりするので、それが癒しになるネ」

福原はカミさんに話したら、一日仕事がいいと言うのだそうだ。もつと働いてもらって、沢山貯金したいらしい。それが妻の本音だろう。孫に小遣いをやる為に働いているなんて嘘に決まっている。フルタイムの職場がなかっただけだ。

「力のある福原さんがものするのは訳ないよ」

「それならいいけどね。心配だったよ」

「大丈夫だよ。俺が保証する」

「じゃあ、午後から担当者が来るから、よろしく」

午前中で終わる福原は安堵の表情を浮かべて管理室を出て行く。いなくなると、弁当を足で何度も踏んづけてごみ箱に捨てた。谷川は自分で作って持ってきたので必要はなく、持ってこなくても食べるわけではない。午後一でオンステージ墨田のフロントマンが訪ねて来た。吉田という背の高い四十代で、管理員室を何気なく見やっつてから挨拶した。

「お忙しいところ、申し訳ありません。福原が大変お世話になってます」

「福原さんは立派な方で、居住者から凄く信頼されています。もし洗浄機でやるようになったら、さらに評価は上がりますよ」

「有難うございます。理事長さんからお隣に負けないようにと、言われましてね」

「高圧洗浄機を使えば、鬼に金棒です」

そんな話をしてから台車を引っ張って九階に上がった。この階は共働きの多く、どの家も不在だから、音を立てても迷惑をかけなかった。谷川はプラグをコンセントに差し込んでから、ノズルの先を床に近づけて水を撒いた。

「かなり水圧が強いですね」

途中から隣の理事長も姿を見せ、見物しながら話しかけてきた。

「こりゃいい。吉田さん、この機械でいきましようや」

「ええ、いいですね。最高じゃないですか」

吉田も賛同している。歩廊も数メートル洗浄してから後の処理についても説明した。廊下をモップで拭き取り、水のかかったドアや窓ガラスの埃も拭くように話した。

「こうすると、お客さんも喜んでくれます」

谷川はしなくてもいいことまでするようにと補足した。

「手すりもピカピカですなあ」と理事長。

「毎日拭いていますからね」

「そうでしょう、毎日でないよ、こうはならでしよう」

「こうしないと、管理会社が月に三度チェックに来て、ギャンギャン言いますからね」

月に三度も来ることはないし、手すりを毎日拭いているわけではなく、汚れていなかったのは拭いた直後だったからだ。谷川の狙いは福原に少しでも多く仕事をさせることだった。

「管理会社から色々と言われるのは、有難いことです」

「そうしないと、つい怠けてしまいますからね」

「吉田さん、うちでも遠慮なく言ってやってよ。無駄に管理費を使っているんじゃないから、これからは今まで以上に力を入れてやってもらわないとね」

「厳重に福原に伝えます」

「管理人さん、一日に何フロア、高圧で洗浄するんですか」理事長が聞く。

「原則、二フロアです。当初は三フロアやっていますけど、いい経験になりました。フルタイムだと、これくらいやらないと、時間を持て余しますからね」

三フロアというのは嘘である。五時まで目一杯やればできなくはないけれどあえて話しておいた。

「うちなんかは、汚れに汚れているから、三フロアくらいはこなしてもらわないといかんね」

理事長が強調した。谷川はここぞとばかりに持ち上げた。

「そうなんです。その通りです。理事長さんはよく理解されていますね。事情を知らない人は、一日一フロアで十分だなどと言いますが、甘いです。管理費を払っている住民は怒ります。せめて一年間は続けてやってもらうのがいいですよ」

「管理人さんが大変じゃないですか」吉田は心配して

いる。

「大変じゃないですよ。慣れれば問題はありません」

「こちらの管理人さんみたいにベテランになつてもらうには、そうしたほうがいいね」

何も知らない理事長の言葉に谷川は胸のすく思いがした。一フロアを掃除するだけで一時間半は要する。

不馴れたと二時間はかかる。もし福原が三フロアをやるとしたら六時間を費やす。他の仕事もあるからできるはずがない。今では一日に一フロアしかやっていない谷川だが、それだけでかなりの労働である。規約を改正するように再三要望しているほどだ。彼の所属している会社はビルメンテナンスが本来の業務だから、アルバイト社員を動員すればできないことはない。会社では懸案事項になっているとのことだ。

しかし福原の場合、試練を乗り越えていったほうがいい。理事長も高圧洗浄機や新しい勤務体制に期待しているのだから。谷川は何としてでもやらせたい。さつきからそればかり考えている。無論、谷川の口に出すことではないが。

「福原さんは、さかんにこの仕事を希望していましたね。熱心な人だから、任せれば喜んでやりますよ」

「貴方は福原と仲がよくて、馬が合うようだね。私も

福原を買ってしまいましたね。彼ならやってくれると思います。ねえ、吉田さん」

「ええ、そうさせていただきます。私どもは理事会へ  
ースで物事を進めていますから」

「うちもやっと、新兵器を取り入れることになってよ  
かった」

理事長はご満悦である。

日曜日、家の付近を歩いていたら、阿久津さんに行  
き会って挨拶をした。晴れがましい笑顔をしていて出  
かける様子だった。彼はからかい気味に聞いた。

「デートじゃないの」

「さあね」言葉を濁した。

「やっぱり、デートだね」

「それはノーコメントですよ」

「美人の阿久津さんにはいいはずはない」

「谷川さんも恋人を作ればいいのに。物欲しげな顔を  
していいないで。女なんかいくらでもいるわ」

阿久津さんの口調はちよつときつくて、小憎らしい  
感じがし、谷川はそのやり取りで失恋したような気分  
になった。そして反感も感じた。阿久津さんなんて美  
人でもないのにいい気なものだ。あんな女、誰が抱い  
てやるものかと急に正反対の気持ちになった。

ラジオを聞いていたら今年は例年になく猛暑だとか  
で熱中症に注意するように呼びかけており、しかし谷  
川はそれもいいと自然の《恵み》を歓迎した。一日に  
三フロアは見ものだなと喜びが腹の底から湧き出て来  
た。

その日もいい天気だった。時には見物がてら冷たい  
缶コーヒを差し入れしてやった。慣れない福原は上  
着もズボンも水で濡らして、顔中に汗を滴らせている。

「福原さん、顔が怒っているぞ」

「怒ってはいないよ。張り切っているんだ」

「さすがに福原さんだねえ」

「だけど、あんたも出しゃばりだな」

「どうしてだね」

「あんたが、こいつを勧めたんだってな」

「まさか、俺にはそんな権限はない」

「理事長を煽っていたって、吉田が言っていたぞ」

「話の成り行きで、そうなたただけだろう」谷川は空  
とぼけた。

「俺にどんどん押し付けられたいもね」

「福原さんのことを、力のある人だと強調したことは  
確かだ」

「はつきり言って迷惑だ」

「そのうち軌道に乗るから、大丈夫だよ。何事も慣れだからさ」

やんわりと激励してやった。福原がフルタイムになると、船堀駅の周辺で行き会うことが多くなつた。七月も二十日を過ぎた頃で、地面を向いて歩いている福原に声をかけた。

「大分ものになつただろう」

「ああ、やり方は覚えた」

「暑いから、体に気をつけたほうがいいぞ」

毎日天候が狂っているみたいだから、この気候は六十歳を過ぎた年配者には危険と言つていい。その危険を避ける方法を知らないと言つた福原はやばいことになりかねない。

「このクソ暑い時に、高圧はきついなあ。時間をオーバーすることがある。土曜日なんか時間通りに帰れなくて、サービス残業だよ」

「初めてだから、時間通りに帰るのは無理だろう」

「おかげでヘトヘトだ」

「とにかく、今は出来るだけ沢山こなしたほうがいい。高圧洗浄機の成果を理事会や居住者に認めてもらわないといかんからな」

「そうかもしれないけど、俺は寿命を縮めているよ」

それはそうだろう、物理的に不可能だから、いくら慣れてもできない相談である。谷川はサービス残業などしたことはなく、できなければ適当に切り上げて帰つてしまふほうだった。だがよそ様のことに口を出すわけにはいかないので黙っていた。そのうち気がついて変更するだろう。

「今日はカラツとして蒸し暑くないね」谷川が言う。

「俺には、たまらないよ」福原は不満らしい。

「水分は取つたほうがいいぞ。俺は塩昆布を持参して、塩分を補給しているよ」

「俺は病院で薬を処方してもらつて、何種類も飲んでいくけどな」

「それはいい心がけだね」

「でも、倒れるじゃないかと不安になることがある」

「そんなことはない。それよりか少々無理してでも、続けることが肝心だね」

そう言つて谷川のマンションの前で別れた。

八月になつても暑さは相変わらずで、汗っかきの谷川は一日に肌着を四回は取り替えるようにしている。居住者の手前、汗臭いのは気を付けなければならぬ。午前中の清掃は十時半頃まで片付けて時間を浮かせる

ようにして、それも誰も人のことは考えてくれないので、自分で自分を守るしかなかった。無論要領よく振る舞っているとさえその通りだ。

マンション担当の課長は今では完全に谷川を認めていて、小言を言うことはなく、大方目をつむっている。会社はコミュニティの下請けだが、彼は管理人としては最初に採用されたので、先駆者扱いにされて評価も高かった。ある日、課長から電話がかかってきた。高圧洗浄機は今後何人かのチームを組んで、一週間に三日間巡回することになったと言うのだ。

「えッ、じゃあ、私はしなくてもいいのですね」谷川の声は上ずった。

「そういうことです。その代り、他の所に力を入れてやって下さい」

「助かります。正直言って、洗浄機は地獄でした」

「私も谷川さんの意見を強く主張しましたよ」

磊落な性格の課長は恩を売った。

「有り難うございます」

これで最大の難関も乗り越えたのも同然だからこれからは気苦労も軽減するだろう。何よりもこの件を福原にも知ってほしかった。いきなり言うのではなくて、時を見計らって話してやり、その時の反応が見たかつ

た。谷川の顔には思わず笑みが浮かんだ。二、三日して舗道を掃いたら福原が通りかかった。

「あのさ」彼が話しかけて来た。

「この間、理事の一人から、廊下があちこち汚れていると、クレームをつけられたけど、いくらやっても水溜まりの跡みたいになるのは、どうしたらいいの」

「水の撒き方にムラがあるのだろう、均等にやっているのか。水圧が強いから、適当にやれば汚れが取れる」と思いがちだけど、そうはいかない。コツというものがあるね」

「そのコツだけど、どうすればいいわけ」

「口でうまく説明できない。こればかりは経験を積んで、会得するしかない」

「何度やっても駄目なんだ」

「何度でもやれよ、な」

「教えてよ」

「教えようがないよ。カンだから」

「ちくしょう」

気の短い福原は腹立たしげに立ち去った。小太りだった彼は、この頃では細身になり顔もやつれて来たが仕方がない。谷川も初期の頃は同じことを指摘されたことがあって、それで自己流を克服したものだ。

もつとも簡単なことだが、教えてやる気にはならなかった。元警察官の福原は案外不器用で鈍いところがあるのか、何かにとらわれているように前に進めなかった。八月の中頃になると、約束通り作業員が三名来て、一日に四フロアを清掃するようになった。ただちにフロア境川専用の洗浄機は撤収された。こんなものは見たくもない。呪縛から解放されたような晴れやかな気分になった。こうなると福原と顔を合わせることもなく、気にすることはなかった。むしろ楽しいくらいだった。「大変だねえ」などとは口が裂けても言わないだろう。これからは福原が毎日苦行に耐えなければならぬ。巡回班が来るようになってから福原を喫茶店に誘った。土曜日の午後である。

「ぜひ俺に奢らせてよ」

渋りがちな福原を引つ張って行き、船堀駅前のタワ―内の喫茶店に入った。ウエイトレスがチキンライスを運んで来た。

「俺、食えないよう」福原が元氣のない声を出した。

「だって、あんたの好物だろう。俺、腹が減って仕方がない。特にこの頃は食欲旺盛だな」谷川は食欲に食べた。

「ところで、そっちは、高圧は別の人がやっているみ

たいだな」福原が聞いた。

「気がついたかね。そうだよ。あれは巡回班がやることになった」

「どうしてだね」福原は不満そうだった。

「どうしてと言われても困るな」

「俺は悔しいよ」

「会社が勝手に決めたことだからな」

「俺の所も何とかならないかなあ」

「よその会社のこととは知らないよ」

「俺んところは一人で三フロアもやっているんだぜ」

「とりあえず、積年の汚れを落とすことが先決だろう」

「不公平だよ」

「俺は二フロアから出発したけど、きつかったなあ。

最初は慣れるためだから、仕方がないけどな。一ヶ月後には一日に一フロアで、今はしなくてもいいことになったわけさ」

谷川は得意げに経過を説明した。

「何々、だいぶ前からフロアしかやっていないのか

い」

「そうだよ。そう言わなかったか」

「回数はあるから聞いたのを参考にしてているみたいだ」

「でも最終的には理事長の判断だからな」

「余計なことを言うからいけないよ」

「俺のせいにするのか、止めてよ」

「なんで、一日に三フロアもしなきゃいかんのだ」

福原は気色ばんだ。彼を怒らせたら怖い。元警察官だから腕力で相手を制するすべを心得ている。どこを突けば敵の力をそぐことが出来るか教えてもらったことがある。

そこで谷川は宥めた。

「一年ほどやれば理事長も考えてくれるだろう」

「一年だって」

「それくらいは仕方ないさ」

彼の場合、一週間で研修期間を終えたが、福原は出来るだけ長くやらせればいい：谷川は復讐心で凝り固まっていた。チキンライスを食べたあとのコーヒーが悪魔的においしかった。福原は両方とも残して、うんざりしている。話はこれ以上弾みそうもないので谷川はレシートを挿んで、早足でレジに向かった。福原はのろのろとついてきた。

秋風が吹き出す頃というのに、毎日ぬめるような湿った日々が続いている。が例年よりも労働量が少ないので夏バテしないですんだ。福原は青ざめてますます

瘦せてきた。白髪が増え、飛び出した鼻毛まで白くなつた。

その日、路上を掃きながら、オンステージの境目に近づいて行くと、福原が植栽を囲んだコンクリートに座り込んでいて頭を抱え込むようにしていた。

「どうかしたのかね」谷川は興味深く聞いた。

「頭がズキズキするよ。こんなことは初めだ。ここに横になりたいくらいだ」

「顔が真っ青だ。管理員室で休んだほうがいいぞ」

「痛い。凄く痛い。どうしたんだろう」

福原はふらつくような足取りで、自分のマンションの中に入っていく。谷川は様子を見たくて後について行った。

「119に電話をしてやろうか」

「いいよ。薬を飲めば治るから」

弱弱しい声で断つたが谷川はかまわずケータイをかけた。十分ほどして救急車が駆けつけたので外に出て、谷川のことを隊員に告げた。気がついた住民がストレッチャーを取り囲んで慰めた。

「管理人さん、どうしたの」

「頑張り過ぎたんだ」

「おかげで廊下は見違えるように綺麗になったわ」

「ありがとうね」

「あなたのように働く人は初めてよ」

「そうよ。三倍も四倍も仕事しているものね」

「体を治して、また戻ってきてね」

「死なないでね」

女たちは口々に声をかけた。福原はなかなかの人気者である。近づいて見ると負けん気の強い尊大な男も別人のようだった。救急車は音を鳴らさずに走り去った。

三日ぐらいして谷川は代務の管理人に聞いた。

「たしか、脳内出血と言っていました」

「エッ、そんなに重い病気ですか」谷川は思わずほくそ笑んだ。

「緊急手術をしたそうです。それ以上のことは分かりません」

おそらく後遺症が残り、仕事はできなくなるだろう。代務の人がそのまま継続することになるようだ。しばらくしてまた福原のことを聞いてみたら、手術したうちでも軽いほうらしく、三週間で退院して家でリハビリに励んでいるという。足が不自由で杖を突いているけれども血色がよくて元気になった。いかにも屈強な福原らしい。

今度の人は、下町の工場で働いていたとかで、温厚実直な人柄で好感が持てた。そして高圧洗浄機は一日に一フロアのみとなったそうである。谷川は新しい管理人のためによかつたと我がことのように喜んだ。理事長と顔を合わせたらやはり洗浄機の話をした。

「福原は一日三フロアやると言っていて、聞かないんです」

理事長はやましいと思っているのかもしれない。

「でも、三フロアは常識ですよ。それで、いんじゃないですか」

「いいですよ」

「何の問題もありません。気にすることなんか、ありません」

「理事長の中には多すぎると、言う人もいました。

でも、福原は積極的で、特にあなたをライバル視していました。はっきり言って、ええ格好しいです」

「あの方は虚勢を張る人でしたね」

「変にプライドが高いんだよ」

「見ていて、分かります」

「アハハハ……」

理事長は声を立てて笑った。谷川も一緒になって笑った。

土曜日の午後、バスで小岩にやって来た。十月中旬で心地よい風が吹いていて、気持ちのいい日だった。南口の駅前広場に立ち、放射状に延びた商店街を眺めた。あれから四十五年が過ぎていて年月の垢が染みこんでいるのが分かった。

(懐かしいなあ)

彼は喜々とした。だが三つの通りのうちどこを通っていけばいいかはつきりしない。とりあえず左側のサングロードから試みることにした。歩き出したらここではないことが分かった。その次にフラワースロード。この通りもどうも怪しい。結局、最後の昭和通りに記憶と重なるものがあつた。突き抜けると出入り口の昭和商店街の看板が目止まり閃くものがあつた。柴又通りを右に向かつていくと、中野洋服店の建物が見えた。建て替えられていて、端正な住まいになっていたが店舗はなく、表札には中野姓のほか異なる名前もあつた。中野家には娘が二人いたから姉妹のどちらかが結婚して親と一緒に住んでいるのだろうか。

立ち止まるわけにはいかず、その前を通り過ぎて裏通りに回り、道を隔てた反対側に立った。塀があり、台所が見えた。怪しまれないようにして立ち去りまた

表通りに出た。当家の主人中野氏が庭で車のボンネットフードを空けて覗いていた。中折れ帽をかぶつたしやれた紳士である。視線が合ったが四十数年前の店子とは知る由もない。お互いに老いて面相も変わった。悶着を起こしたとはいえ、心を引かれる思いがした。

それから江戸川に行こうとして道を間違えガソリンスタンドにいた女に尋ねたら、反対のほうに来たことが分かった。戻って歩いていると川にぶつかった。土手から河原に降りると、グラウンドがあり、その広さに驚いた。風が吹いていて春のような気候だ。ひとみと座っていたのはこの辺りだろう。肉付きのいい体を思い出し、好色な気分になった。妻を亡くして以来、性とは無縁に過ごしている。誰かふさわしい女はいないか。亡妻の友人の阿久津さんはこの間ウオーキングの途中、男と寄り添って歩いているのを見かけたがあの雰囲気は特別の關係だろう。もつとも前から嫌いになつていたから関心はなくなった。

帰りに小岩駅の周辺をぶらついていたら、割と大きな古本屋があり、立ち寄って映画の本を一冊五百円で買った。当時は小岩にも映画館があり、よく観に行つた。本屋を出たらサングラスをかけた老人が前を歩いていた。杖を突き、足がもつれているのを見て、

オヤと思った。オンステージ隅田の元管理人に間違いない。一瞬ためらいながら声をかけた。

「福原さんだろう」

彼は振り返った。

「ああ、あんたか。俺はこのザマだよ」

「だいぶ、変ったなあ」

「これでもよくなつたんだ。手術の経過がよくてね。無理しなければ大丈夫だそうだ」

「じゃあ、よかったね」

「こうなつたのも、理事長の馬鹿野郎どもが、一日に三フロアもやらせたからだ。今もやっているのかい」

「いや、そんな殺人的なことはさせないさ」

「じゃあ、何フロアだ」

「一フロアだけだ」

「一フロアだと。何でだよ」

谷川が提案したのだが、言う訳にはいかないので黙っていた。

「俺はあんたの嘘臭いものの言い方に不信感をもっていた。あんたが裏で操っていたんだろう」

「まさか、俺にそんな権限があるはずない」

「黙れ！この野郎、ぶん殴ってやろうか」

「ま、待った。誤解させたら謝るよ。ほら、この通り」

谷川は体がブルブル震えた。

「お前を殺してやりたい」

「暴力はいかんよ」

谷川は恐怖感のあまり、走り出そうとしたら、グイと左の袖をつかまれて、あたかも機械に挟まれたかのように身動きできなかつた。病後というのに、こんなに力があるとは信じられなかつた。

谷川は思いっきり力を入れて突き放し、小岩駅に向かって走りだし構内に逃げ込んだ。福原が足を引きずりながら追いかけてきて、遠くで「卑怯者！」と罵つた。ハラハラしていたら、やっと電車が来たので、反対の方角だが飛び乗った。扉が閉まって走り出した。

谷川は息が苦しくてハハハハしながら、自分は正しいと納得させた。悪いことなんかしていない…

初稿 2009年11月 みなせ44号